

71歳の現在、私は今までの人生をどう思っているのだろうか。まずは日々習慣的に日を送るだけで特別のことでもないと、だらだらと一日が「あっと」という短い時間に過ぎ去ってしまっているように思える。4月17日18時、人間が誰しも願う幸福、富みも若い時代には必要な気もするが、若い時の苦勞は買ってでもせよ。という諺には私は長い間、苦々しく思いうんざりしてきたが、物事は嫌い、危険、期待しない方に行ってしまう。今でもその諺は好きではない。それにしても民族浄化、環境浄化といえば言葉が美しい。浄化される者とは弱者、弱者とは正しい者でも悪い者でもない。強い者より相対的に弱いということだ。問題は強い者が弱者を食う。これは生物の本能と言われているが、食われる者にしてみれば理不尽で命を賭けて抵抗する。強者と弱者は相対的ものだから弱者が食われてしまうと強者の一部が弱者になる。延々と続いている凄惨な光景である。今にして思えば、生きていようが、生命を大切にしようが、それが弱者であれば、強者にはその弱者の恐怖は通じないのかもしれない。食卓のご馳走に目を輝かせて何が悪いことがあるだろうか。日夜、世界中のテレビは料理の番組で埋め尽くされている。人間の食卓を飾るだけに生まれ殺される数知れない牛、豚等の多くの生き物たち。同様に鬼の食卓の一の一品に人間の丸焼が添えられたとしても何の不思議があろう。人間の丸焼のおいしい料理のノーハウと書いただけで私の胃の腑はおかしくなる。何故か、迷彩服をきて愉快そうに乱射して本人も自殺した少年がいた。私は分からないながら確かに一理はあるように思える。また想像を絶する凄惨な戦いにすら奇蹟的に生き残る者がいる。人間に生まれれないことが一番の幸せだと言った哲学者があるそうだが、言いえて妙である。所詮、人間である故の悲しみと喜びなのだろう。言いかえれば系統としての人間は生物進化の最終とされ母と父によって種族は過去から未来へと維持継続されている。種族という系統はきわめて単純に見えながら個体は30億とも或いは50億という細胞をもち、本人とは関係無く誕生し、ただ一つ他の生物と異なることは金銭獲得即ち経済行為だろうが、男女関係にまで金銭感覚を絡ませ人生の大半の時間とエネルギーを消費して死亡してゆく。狡猾、正直さまざま織り混ぜて敵に或いは味方に組み込まれ、複雑な規律、冷酷な軍人、あらゆるものを集めて強者はより強者になる。弱者は弱者で対抗する。バランスがとれていることを共存と言う。美しい言葉ではあるが、永遠に食われるもの。食われる者と食う者。このカップル間にながれるエネルギーは、何を意味しているのか。過酷な生存競争の戦いの中にこそ生命の意義があるとされている。惨殺、戦煙、異常の中にしか平安を見いだせない特別教育こそが戦いに生き残れる強者の義務なのか。相手を狙い殺した時の充実感、跳躍の実感と肉体の疲労がもたらす生理こそが生存感をかきたてるもの。肉体は想像、幻想の表現まで得て無限に拡大している。空腹感または満腹。恐怖、犯罪、呪が高揚し肉体は戦いへと或いは行動へと急激な脱皮を遂げる。一見、個人は勿論、私自身も例外ではなく「生きているなあ！」と実感しているように思える。17日16時、私達が美德、真理としていることの方が守るにしても知ろうとするにも努力、勉強が必要なことは事実である。然しながら民族主義高揚のとき生命を賭して戦場へと志願して行く。また流行ともなれば恐ろしくかかとの高い不安定の靴を多くの女性が履く、これは努力、修行といったも

のではない。自ら金銭を支払い命まで捧げようというのだから誠に人間とは。人間の一人である私はどう理解すればいいのか。人間にして人間が分からない。人間の生態行動は30-50億の細胞にも負けず多様であり複雑怪奇なものかもしれない。所詮、人間が人間を知ること自体が無理なのか。どうやらこれが永遠の謎らしい。今まで永遠の謎に思えた死すらクローン羊の誕生で理論的には克服したそう。このことは別の項に書いたが、生きたうえでの問題とは思いますが、結局、人間が人間を理解できないかぎり、すべては堂々巡りの、相対化された昔からの生存競争が一見、凄惨な風景に見えたとしても怠惰な間延びした日々が飽きもせず大宇宙崩壊の日まで続くのかもしれない。